
ひとりぼっちの誕生日

朝木ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりぼっちの誕生日

【Nコード】

N8747P

【作者名】

朝木ひなた

【あらすじ】

主人公センはひよんなことから町一番の大富豪、ワトキンス家の誕生パーティーへ参加する事になる。しかし、ワトキンス家にはある秘密が隠されていた。

最弱プレイヤー

真剣勝負の真つ最中。

狭く薄暗い部屋で白と黒のマス目が鈍く光る。

命を賭けた一勝負、というのは俺にとつて決して喩えなどでは無い。この勝負に負けることは死に直接繋がるからだ。

俺は目の前にいる小憎たらしい金持ちの兄ちゃんに只今チェスで29連勝中だ。

チェスで30連勝すれば今持つてる有り金全てくれる、なんて兄ちゃんが言うもんだから俺は全てを賭けた。家族が住んでる家、飼ってる馬、さらには村で一番の美人と評判の妹も嫁にやるって。もちろん俺の独断で、だ。

そしたら兄ちゃんはワトキンスっていうこの街で一番の大富豪のパーティーの招待状をもらえるって言い出した。こつちとしてはもちろんラッキーだと思ったけど、俺は金さえ手に入ればどうだって良かった。

兄ちゃんの腕前なんて知らなかったけど負ける気なんて針の先ほども無かった。

勝負は俺の圧勝だった。

兄ちゃんはこれまでいっただいどんな学校教育を受けてきたんだろつか。知能の発達度合を伺いたい。こんなプレイヤーなら幼稚園児と戦った方がまだ面白かった。本当にそれくらい兄ちゃんは弱かったんだ。

30勝目

「チエックメイト」

俺は兄ちゃんの白のキングを片手で摘みあげると口の端を吊り上げ、ニヤツと笑った。

兄ちゃんは呆然と空を見つめる。まさか自分が負けるとは思っていなかったのだろう。兄ちゃんの口はみるみる開いていき、今にも顎が外れそうだ。

「約束、覚えてるか？」

有り金全部。いったいこいつの所持金はいくらなのだろうか。俺が見る限りじゃ、少なくともキヤーデにある火曜日限定アイス三段重ねを俺と、仲良しのリースの分を買えるくらいは持っているはずだ。

食の都と言われるキヤーデには美味しい食べ物がたくさんある。最後に行ったのは去年の秋、だったかな。機会があればまた行きたいな。

兄ちゃんはせっかくの整った顔を金魚みたいに目も口も真ん丸にしたままだ。意識はあるのか、無いのか。

確かめに兄ちゃんの顔を覗き込んだ時、突然後頭部を強く押され、テーブルに顔を打ち付けた。

テーブルの振動でチェスセットのコマが倒れる。

いてて。俺が悪態をつく前に兄ちゃんが分けのわからないことを口走った。何と言っているかは聞き取れない。

勝負の前の契約により、インチキをすることはできない。要するに、兄ちゃんは俺に有り金全部と招待状を渡さずにトンスラするなんてことは出来ない。

もしそんなことをしたら、契約違反により古い呪いがかけられてしまう。これについては俺よりも俺の祖父がよく知っている。

だいたい兄ちゃんのしようとしていることは察しが付く。

契約違反にもならず、有り金全部 + を渡さずに済む方法

そう。俺を殺せばすべてが丸く収まる。

俺の察し通り、兄ちゃんは俺の首を掴み、締めだした。

この男の力はそんなに強くない。でもさすがの俺も首を絞められるとヤバい。ヤバいと分かってはいるのだけれど、体は動かない。

首を絞められている時点でもう終わりだ。手にナイフでも持って

いない限り、相手を振り払うことは難しい。

しかも今はテーブルを挟んでいるため、得意の足技を繰り出すこともできない。

うつすらと目を開き、男の様子を覗いた。

目はさっきの金魚の顔のまま、口はきちんと閉じられている。

その時、誰かが仕組んだんじゃないかと思うようなばつちりなタイミングでリースが現れた。そして男が俺の視界から消える。それと同時にのどの違和感が消え、俺は地面に倒れた。

俺は喉に手を当てながら全身で呼吸をした。

「セン、無事か？」

先ほどとは比べ物にならないほどの空気の量が肺に入り、咳き込むことしかできない。

「今度はどんな揉め事をしたんだよ？」

途切れ途切れになりながらなんとか答えた

「ただのギャンブルだよ。それよりお前、どうやってここに来たんだ？」

ここは港町にある荒廃した高級ブティック店だ。誰も寄り付くはずがない。

あの金持ちの男は、昔自分の父親がこの店を経営していたとか何かでここにやって来ていたようだった。

リースは俺を引っ張り起こすと言った。

「僕もこの町に用があつたんだ。それでセンのバイクを見つけたからちよつと立ち寄ったら殺人現場に遭遇したってわけ」

リースは苦笑を浮かべた。

「何かこの人の気に障ることしたのか？」

「まさかまさか。この人が勝負に負けて勝手にキレたんだ」

と、男は呻きながら上体を起こした。リースに殴られた頬を撫でながら。

男はまた俺を殺しにかかると思われたが、以外にもすまなさそうに口を開いた。

「悪かった。さっきは気が動転してて……。許してくれ」

「その気持ちは分かるけどな、今度からは気をつけなよオッサン」

「兄ちゃんからオッサンに格下げか」

彼は力なく笑った。自嘲にも見えるその笑い方は、父さんが母さんに怒られた時の顔にそっくりだ。

「僕のお金はここに置いていくよ」

男はずっしりと中身の詰まった袋と財布をテーブルに置いた。

「家にはもつとあるんだろ？」

男は肩を大きく震わせた。

「え、いや、そりゃあるけど……」

男は俺がまだ金をぼったくろうとしていると思っただらしい。

彼のおどおどした様子がおかしくて少し笑いそうになってしまった。

「そうか。ならいいや。全部取っちゃったら悪いし」

俺がそう言うのと男は落ち着いた様子で溜息をついた。

男は先天的に色素の薄い、ブロンド色の髪をくしゃくしゃと掻いた。

そんな行儀の悪い仕草も品がある。この男は育ちが良いのだろう。それに比べると俺は不良に見えるかもしれない。別に悪いことはしていないけど確かに育ちは悪い。黄色みの強い茶色の髪は父譲りで、その他は全部祖父ちゃん譲りだ。じいちゃんにそっくりね！なんて言われる度に自分の顔が老けてるのか、なんて幼いころは気にしていた。

男は長方形の紙切れを差し出した。いや、紙切れ、なんていう言葉は失礼か。頑丈な、きちんとした紙だ。

「招待状。僕は一つしか持ってないけどこれで二人パーティーに参加できる」

男の目を覗きながら俺は問いかけた。

「本当にいいのか？」

「ああ。もちろん」

即答。揺らぎない瞳。

「本音を言つと行きたいよ。それはたいそうな豪邸で最高のひと時を過ごせると聞いたから。でも勝負に負けたら君にこれを譲るって約束だから」

俺は目を細め、微笑んだ。

「兄ちゃん、もう俺みたいなやつとチエスの勝負なんてすんなよ？」

そして兄ちゃんと俺は別れた。

兄ちゃんは俺たちに背を向け店を出る。

もう二度と会うこともないだろう。もともと接点のない二人だ。

「行ったな」

リースが呟くように言った。耳に心地よい響きが残る。リースは見た目も発する声も抜群に良い。その上頭脳明晰、運動神経抜群と来た。

科学者たちが最高の技術を駆使して万能の人造人間を生み出したとしてもリースには敵わないと俺は思う。

「リース！」

俺が笑顔を向けるとリースは少し困惑した様子を見せた。俺が笑つてる時には大体ロクなことを考えていないからだ。だけど今度は違う。

「出発の準備だ！！」

風の警告

西日が眩しい。目の上に手を庇のようにかざし、俺は海を眺めていた。

闇と光の交じり合った短いこの時間、全てが真っ赤に染まる。

俺はこの鮮烈な風景が幼い頃から好きだった。

風が海にぶつかり、波を高くする。

俺と友人のリースは港にたたずんでいた。

金持ちの誕生日会に参加するんだから、いつも通りの格好をしていくわけにもいかず、俺は学校の制服を着ていくことにした。

黒のスボン、白のワイシャツに真っ青なネクタイを締め、ローブを羽織った。これならいつもよりマシな格好のはずだ。

学校のエンブレムが少し気になるのだがどうしようもない。

「もうそろそろ船に乗らないと遅れるんじゃないのか？」

背後でリースの声がした。

「そっだな」

風で声が飛ばされる。風は俺たちが誕生会に行くのに反対意見の様だ。場違いだから引き返しな、と。

冷えた手先をローブの中に入れ、リースに歩み寄った。

「行くか！」

走ると風が更に冷たかった。けれど、そんなこと別に気にならな
い。今興味があることと言ったらこれから俺たちに何が起こるか
ということだけだ。

高まったテンションが手伝って顔が緩む。

「お前も子供みたいに笑えるんだな」

以外だなーとリースが俺の隣でふと笑った。

「うっせ」

確かに俺は同じ年くらいの子と比べると冷めたところがある。それは自分でも自覚済みだ。

でも、俺よりもずっと大人びたリースに言われるとバカにされているような気がした。

背も自分より少し高いし、頭だって良い。そんなリースのことは正直羨ましく思っていたし、憧れてもいた。

でも、そんなリースも以外に呑気で抜けてるところがあるから、その部分は俺がフォローしているつもりだ。

だから、俺たちはお互い支え合っているってわけ。

リースには俺が必要なんだ。そして俺にはリースが必要。

お互いにプラスの存在。すなわち、俺たち最強コンビ！って事だよな。

ま、実際そう思ってるのは俺だけかもしれないんだけど。

そこんとこどうなんですかね？リースくん。

リースは俺の気持ちを察してか否か、言葉を発した。「セン、船はそつちじゃないぞ」

…… たまたまだ。

いつもは俺が注意する側なの！

船にはたくさんの乗客がいる。心なしか、若者が多い気がする。

豪華客船とはまさにこの船のことだ。縦幅も横幅もかなりある。

俺の学校の全面積の倍はある。しかもこの船にはプールも図書館も映画館もあるときた。暇をすることはなさそうだ。

公爵夫妻の別荘は一体どこにあるのだろう。こんなに施設の整った船をよこすということは着くのに時間がかかるのか。

「部屋でも探しに行くか」

リースが言った。リースがこちらを振り返る。

「…… そうだな」

たくさん人がいるにもかかわらず全く混雑しないこの部屋からは妙な気配がしてならない。

俺は辺りを注意深く見まわした。しかし何も無い。

あるのはたくさんの人々。豪華な装飾品。花
どこもおかしいところなんてない。

「なあリース。何か変じゃないか？」

俺は何となしにリースに聞いてみた。

> i 1 9 5 8 2 — 2 6 4 6 <

「何かつて何だよ？」

リースはいつもと変わらない笑顔を俺に向けた。

「…さあ、なんだろうね」

俺はそう言い話を蔑にした。

自分から話をふつておいてこつするのめどつかと思っけど、変に
自分の意見の押し通し、気まずい空気になるのはどうしても避けた
かった。

「とりあえず部屋へ行って休もう。センはプールとかゲームセンタ
ーとか行きたかったりする？」

俺は子供か。映画館とか図書館にしてくれ。

「……別に。俺はリースに付き合っよ」

大広間から俺たちは階段を上り出て行った。

小さな男の子が2人、俺たちのわきを通り過ぎる。

と、片方の男の子が転び、わんわんと泣き出した。

俺はじつとその2人を見た。

うるさかったから、とかそついうわけじゃない。

その2人がちよつとだけ心配だったから。

ただ、助けようとは思わなかった。

リースが2人に駆け寄ろうとするのを俺は手で制した。

リースは不可解そうな顔をする。

けがをしていない男の子がけがをした男の子を慰め、背負つとこ
ろだった。

重そうに、よろけながら階段を下つて行く。

「行こつ」

俺はリースに先へ行くよう促した。

一歩足を前に踏み出す。

ふかふかのじゅうたんに足が沈む。

「昔、センもあんなことあったよな」

リースは遠い目をして思い出を見つめる

「ん、あつたか？」

俺は記憶を探る。しかしそんなもの出てこない。

「10歳くらいの頃、シアンにうちまで運ばれてきたんだぜ？」

シアンとは俺の1つ下の妹だ。真っ青な瞳だったからシアンって俺がつけた。

俺はシアンの兄であり名付け親だ。

「へえー。ナイスガッツだな。2つ上のリースを運ぶとは」

我が妹ながらよくやった。と、俺は自慢げな気持ち。

俺の言葉にリースは笑った。

「違う違う。運ばれてきたのは俺じゃなくてお前な」

「へ？」

俺はすっとんきょうな声を出した。そんなの初耳だ。

「崖から落ちたとかだっけな。かなりやばかったぞ」

「そんなの、全く記憶にないんですけど……」

俺は額に手を押し当てた。

「きつとその時に頭を強く打ったんだよ」

リースは懐かしそうに話す。

「あの時はシアンとあまり背丈が変わらなかつたしね。いや、シアンの方が高かつたか？」

いや、俺の方が高かつたし！とムキになって反発するのはガキだ。

俺は不快そうな顔をする事なく、すまし顔をしたまま尋ねた。

「何で崖なんかに？」

「よく分からないけど、シアンがお前にずっと謝ってたぞ」

シアンが俺に？

俺は唇に人差し指の第二関節を当てた。考え事をする時の癖だ。

「よく思い出せないけど、センはあの時から身長が高いとは言い難

「かつたな」

悪びれた様子もなくリースは言った。

「ふざけんなよっ。今は平均以上あるし！」

シアンよりも高いし！」

正直者なのか、俺をからかっているのか。

後者のような気がするが、俺は気分を沈めることにした。

感情的になるのはあまり好きになれない。

それが自分でも、他人でも。

「本当かよ」

リースは心底驚いた顔をした。

「ホントだよ！」

俺はちよつと怒った顔をして、リースは楽しそうな笑顔で、たくさんあるうちの一室の船室に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747p/>

ひとりぼっちの誕生日

2011年3月11日01時10分発行